

傷
痕

目次

第一章	卒業のエチュード	2018年
第二章	天国	2018年
第三章	記憶	2015年
第四章	永遠	2015年
第五章	週末ピアニスト	2014年

第一章 卒業のエチュード

2018年

それが起こったあと、地面にしゃがみ込んだまましばらく動けないでいた。

一時停止していた世界が再び息を吹き返したことは、目の前を過ぎる人の靴音で分かった。何事もなかったかのように立ち去る人々。私だけが痛む頭を抱えたまま、じっとしている。

どうしよう、どうすればいいのかな……。

混乱する頭でそのことばかりを考えていると、誰かがスカートの裾をひっぱった。振り返ると、同じ目の高さに血の気の失せた男の顔がある。

反射的に身を引くと、スカートの細糸がビリビリといやな音を立てた。それでも男の手は私を掴んで放さない。砂場で遊ぶ幼い子供のように地面に尻をつけて、四角い肩をぶるぶると震わせている。色のない唇は緊張したように結ばれて、頬に汗の粒が流れていた。

頭痛を忘れて、私は男に見入った。初めのうちは引きつけの発作でも起こしているのかと思っただけで、どうやらそうでないらしいことは雨の日の曇りガラスのように虚ろな目を見ているうちに気づいた。

男は身を縮めて震えていた。今起こった出来事を、必死でやり過ごそうとしていた。手に触れると、子供のような迷いのなきで強くしがみついている。

私は立ち上がった。痛みは既に引いていた。男の手を引っ張るとよろよろと彼も立ち上がる。私よりもずっと背が高い。身体も大きい。三十代の、大人の男——ただ外見だけを見れば。

「怯えないで。大丈夫だから」

なるべく優しく声をかけた。二、三秒間があつて、彼はこっくりと頷いた。

「ぼく、だいじよぶ」

成熟しきった大人の声でたどたどしく彼は言った。ああ、やっぱりこの人は普通の人とは違うんだ、と思いながら、私は彼から手を離れた。支えをなくして男の手は数秒宙を彷徨ったが、やがて自分のズボンを掴

んだ。

男はその場から動かなかった。地面を見つめたまま、唇をもぐもぐ動かしている。惚けたような掴み所のない表情で、行動の目的を失ったように立ちつくしている。私はきよろきよろとあたりを見回して彼の家族を探すが、それらしき人は見当たらない。

迷子なのだと私は思った。迷子というか、きつと徘徊者なのだ、この人は。高校生の時に死んだ私の祖母や、現在困惑の種になっている親戚の大叔父さんと同じように。彼らに比べると、彼はずいぶん若いけれど。「家はどこ？」と聞いても男の意識は遠くへ飛んでしまっていて、ただ曖昧に頷くだけだ。

仕方がないので交番へ連れて行こうと彼の腕を取ると、冷たいチェーンの腕輪が指に当たった。

腕輪には平べったいプレートがついていて、簡単には引きちぎれないよう、こちらも白い鉄で出来ている。

おおざき・みなと

プレートにはひらがなで名前が彫り込んであった。その下に、油性の黒マジックで手書きの住所も書いてある。

「おおざきさん、みなとさん」

名前を呼んで初めて男の目に光が宿った。浮遊粒子を追っていた目が私に向けられると、おおざきさんは微笑に笑った。

私たちは歩き出した。腕輪に書かれた住所はここから遠くない。

おおざきさんは覚束ない足取りで、ふらふらとあとをついてくる。目を放すと道路の方へ歩いて行ってしまえそう。だから私は、駅前から延びる坂道の途中で彼の腕をとった。

チェーンの迷子札を再確認する。うん。この道で間違いない。

おおざきさんの家は坂を下った先の住宅地の中にあつた。坂の上からおおざきさんの家の方向を見ると、低い屋根の密集した家の中に場違いな高層ビルが四棟

見える。つい先ほどまであの建物の地下へ潜っていたというのに、もう懐かしさで胸がじくじくと締め付けられる感じがする。

私の視線を追いかけて、おおざきさんは建物を指さした。薄い唇が微かに開いて、低い声が漏れる。

「だ、い、が、く」

「おおざきさん、知ってるの？」

「だ、い、が、く」

「私、三年前にあの大学を卒業したの。ピアノを弾いていたのよ。今日はね、後輩の卒業演奏会があったの。うちの学校の伝統で、卒業式の一カ月前には演奏会を開くのよ」

おおざきさんは不思議そうな顔で首をひねった。長すぎる言葉は理解できないらしい。

えん、そう、かい。

一語一語をはっきり区切って言うとおおざきさんはやっと合点がいったように頷いた。

調子が良かったのは大学卒業までのこと。

小学校から高校にかけて受賞したトロフィーの数は数え切れない。一時期、私はテレビや雑誌でも紹介された。三年前の卒業演奏会でも学科一の優秀生に選ばれて、大勢の観客の前でピアノを弾いた。拍手がわき起こり、称賛の声と羨望の眼差しに取り巻かれ、あとはずっと下り坂。

大学を出てから三年間、ありとあらゆるコンクールに応募し、私は落選し続けた。何時間という練習を積んで、今回が最上の演奏だと思っても予選にすら名前が通らない。今までの栄光が嘘のように、何もかも上手く行かなくなってしまったのだ。

そんなときに鑑賞した後輩の演奏はかつての私とどこか似ていた。テンポが早く、飛び跳ねるように乱雑で、まだらな演奏の中に耳を疑うほど澄みきった音が耳をかすめる。

かつて私が弾いていた音と似ていて、もう二度と出せない音。後輩の演奏は技術力に欠けていた。昔の私みたいに。でも、なぜだろう——胸のざわめく余韻が会場を出てからずっと続いている。

——好きなように弾けばいいのよ。

——本当に価値のあるものは、自分の中にしかない
ってこと。

一緒に演奏会を見に行く予定だった友人から、突然キャンセルの電話が届いた。演奏開始三十分前、携帯電話の電源を切りかけたところだった。

「ごめん、今日の演奏会だけど、急な用事が入って：
：みんなによりしく伝えて」

何年も聞いていなかった彼女の声を聞いたとたん、頭の中で蘇った。ずっと心に残っていたあの言葉は、かけがえない友人が教えてくれたことだった。

今でもコンクールに落選するたび、私は彼女の言葉を思い出す。「好きなように弾けばいいのよ」。それは傷口にかける消毒液だ。じゅわじゅわと泡をたて、血のにじんでいた患部は色の薄い傷痕に変わる。もう何箇所心に傷を作ったのだろう。

私は、何がしたいのだろう。

何かが後ろ髪に触れる。驚いて背後を振り返ると、おおぎきさんの指が間近に迫っていた。私の突然の動作に驚いて、おおぎきさんの視線が戸惑ったように左右に泳ぐ。

彼の意思に反するように、指先が再び私の後頭部へ伸びた。男の人にしては細く、繊細な指がバレッタをわし掴む。毛根を引きちぎる、鋭い痛み。

私より年上で私より背の高い、知能に障害を持ったこの男を恐れる気持ちは少しもなかった。相手の手をぎゅっと掴むと、彼はわずかなうめき声をあげて、放心したように体を脱力させた。唇から低い声を漏らして、目元の生の光が弱くなる。

彼の手からバレッタを奪い返すと、私は新たにポニテールを作って髪に留める。

私たちは再び坂道を下りだした。

私が学生だったころと比べ、街並みはすっかり変わってしまった。古い家のあった場所はコンクリ

「トの空き地に埋め立てられ、アスファルトの道路も新しく塗り替えられていた。

整備されたというよりも、人々が築き上げた土地を白紙に戻してしまったと言った方が正しい。その中に、点々と昔の傷痕——半壊したまま放置されている家々。あれらはわざと撤去されずに残っているのか、分らない。

携帯電話のマップを確認しながら、おおざきさんの腕輪に書かれた住所へ辿りつく。

彼の家は周辺の住宅と同じような形の、小ぢんまりした一軒家だった。玄関の表札に「大崎」と書いてあるので間違いない。

呼び鈴を鳴らすと、私の両親ほどの年齢の中年女性が出てきた。ぴっちりしたトレーナーにデニムのパンツ。黒く長い髪をひつつめにして、こざっぱりとした女性だ。

おお、と背後でおおざきさんが言いよんだ。おお、おお……そして、やっと言葉を見つけたようにおおざきさんは言った。

「おかーさん！」

のっそりと私の背後から姿を現して、おおざきさんは一歩前に進み出た。

「湊人！」

思わず飛び出た母親の驚きの声に、おおざきさんは体をぶるぶる震わせた。すぐさま踵を返して私の背後に隠れる。ごめんよう、とくぐもつた声が背中から聞こえてきて、私は微かに笑った。おおざきさんたら、なんだか童話に出てくるクマみたい。

おおざき夫人は私に向かって頭を下げた。

「すみません。私、気が動転しちゃって、突然のことだったから……」

湊人、とおおざき夫人が優しく名前を呼ぶと、身を縮めていたおおざきさんの体が安心したようにまっすぐに伸びた。そのまま私の手を掴んで家の中へ入ろうとするので、私は慌てて足を踏ん張った。

「おおざきさん、私もう帰らなくちゃ」

そう言っても、おおざきさんは嫌々と首を振って、なおのこと強い力で私を家に招き入れようとする。お

おぎき夫人も私の顔を見て、笑みを作った。

「わざわざ家まで送り届けていただいて……外、暑かったでしょう？ 良かったら、お茶でも飲んで行ってください。息子も喜ぶと思うから」

いいえ、お気遣いなく。そう言つて一端は断つたものの、おおぎき夫人は元来から持っているらしい澁刺さで引き下がらなかつた。何回か押し問答が続いたのち、このやりとりを見ていたおおぎきさんがしびれを切らして言つた。

「いいもの、聴かせるよ！ いいもの！」

玄関からびかびか光るフロアリングの廊下を歩いて、リビングに通された。部屋は広々としていて、趣味の良い調度品があちこちに飾られている。油彩画の大きなリングや、手作りのフラワーリース、色ガラスを混ぜて焼いた花瓶など。家中が様々な色彩にあふれていた。

キッチンとひと続きになっているリビングには大きな円卓があつて、ふかふかのソファがぐるりと周りを

囲うように置いてある。進められるがままにその一つに腰掛けると、おおぎき夫人は湯を沸かしにキッチンへ立った。

「あの、あまり気を遣わないでください。私、たまたまこちらへ向かう用事があつて、そのついでにお送りしただけですから」

知り合つたばかりの人の家に慣れず、咄嗟に嘘をついた。しかし、思つたほど声が張らず、おおぎき夫人の耳には届かない。所在なく足の指先をすりあわせながらおおぎきさんの姿を探したが、彼はいつの間にか姿を消していた。

白いレースカーテンの隙間からこぼれる、夕焼けの光。フロアリングの床に、細かな模様の影ができていく。遠くから、カラスの鳴き声が聞こえてくる。

微かな音を立てて、目の前にティーカップが差し出され、大したお構いもできなくてごめんなさい、そう言いながらおおぎき夫人はテーブルの向かいに腰を下ろした。

「湊人を送つてくれてありがとう。急にいなくなつた

ものだから、心配していたんです。てんかんの発作があるので、道で倒れていたらどうしようかと。もう少しで警察に連絡をしていたところでした」

「私がおおぎさんに会ったのは駅前のロータリーでした。道が分からなくて迷子になっていたんです」

ああ、とおおぎ夫人は額を押さえ、深い溜息をついた。

「息子が事故に遭ったのも駅前だったんです」

「事故？」

おおぎ夫人は頷いた。

「三年前に湊人はバイク事故を起こしたんです。乗用車と接触して、頭に深い傷を負いました。命は奪われなかったものの、脳に重い障害が残ってしまって、それが今も悪化し続けているんです。徘徊すると思いつ入れのある場所に惹かれて行ってしまうもののかしら。もう私の手に負えなくなってしまうって、困っているのよ」

しばらくの沈黙。ごまかすように紅茶に口をつけた。熱いダージリンティがひび割れた唇にしみこんでずき

ずきと疼いた。夫人もティーカップに口をつける。

バイク事故、障害、徘徊……それらの言葉が私の頭の中をぐるぐるまわる。どうしてこんなに私的な話を見ず知らずの私に告げるのだろう。何気なく呟いただけなのか、それとも意識的に、彼女が私の興味を喚起するような発言をしたのか、分からない。

もしかしたら、おおぎ夫人は私にその話をしたくてうずうずしているのかも知れない。誰か、親族以外の、深い関係に陥ることのない人間に愚痴を吐きたいのかも。私がおおぎさんの病状についてちよつと興味を示したようなことを言えば、紅茶を三杯も四杯もおかわりするハメになったりして。

そんな憶測を始めたら最後、早くも暇を告げたい衝動に駆られた。

私には誰かの感情のはげ口になっている暇なんてない。一分一秒でも時間が惜しい。ピアノに向かえば向かうほど、次のコンクールの成績が一点でも多く獲得できると信じているから。

親切心を利用されたような感じがして、にわか

憤慨しながら、私は席を立つ——いや、立とうとした。ポーン。どこかからなじみ深い音が聞こえ、私は肩を震わせた。私の思考を飛び出し、幻聴が聞こえたのかと思った。しかし、凜としたピアノの音色が跳ねるように再び聞こえ始めると、おおざき夫人に尋ねずにはいられなかった。

「一体誰が弾いているのですか？」

瞬間、部屋の調度品についたあらゆる色彩が物体の枠を飛び超え、音となって耳の中へなだれ込む……そんな印象の旋律が部屋中にあふれ出した。

それは正式に、「音楽」と言つて良いか分からない。スタックカートばかりの音の洪水。耳の痛くなりそうな速弾きの連続だった。よどみなく生まれ続ける、音・音・音。

とても奇妙なリズムだ。敢えて秩序を壊そうとしているのか、完璧な演奏の中、奈落へ突き落とすような穴落がところどころにくわえられている。それは恐いもの見たさに近い。調和の中の不調和が、聴く者を不安にさせ、違和感とともに曲の中へ引きずり込む。こん

な演奏、聴いたことがない。

様々な音が入り交じり、大幅にアレンジが加えられていたが、私はこの曲を知っていた。それどころか、血を吐く思いで引き続けた因縁の曲。あの大学を卒業した者なら誰でも知っている。

これは「卒業のエチュード」だ。

私の大学では必ず、卒業の実技試験で「卒業のエチュード」を弾く。それによって、卒業資格が得られるか否かが決まる。中でも一番上手く演奏した者が、三月に行われる卒業演奏会のピアノ・ソロを弾くことができる。いわば、在学時の名誉を左右する運命的な曲なのだ。

あの大学を卒業した者しか知らない、秘密の音色を弾いているのは誰？ そう思いながらも、既に予想がついていた。ソファから立ち上がり、リビングと隣室を隔てる引き戸に手をかける。隙間から、繊細な、男の人の手が見える。

赤茶色のアップライト・ピアノを弾くおおざきさんの目は爛々と輝いていた。迷子になっていたときの、

ぼんやりとした表情は欠片もない。額に玉の汗を浮かばせ、前後に体を揺らしながら、生き生きと鍵盤をはじく。おおぎさんは笑っていた。誕生日プレゼントを手渡された子供のように、嬉しそうにピアノを奏でていた。

そんなおおぎさんを見ているうちに、私は気づいた。そして、理解した。落とし穴にはまったようにして、欠落する音の原因。

おおぎさんには小指がない。右手の第一関節から、小指が切断されていた。

小指の担当する範囲の音は第二関節が触れるだけにとどまり、鍵盤を叩くことが出来ない。これもバイク事故で負った怪我なのか。丸くすぼまった小指が音のない音に触れるたび、わたしは我が身のこのように身のすくむ思いがした。

数分、音は流れ続け、ある瞬間、静寂のもたらす鋭い余韻を残して、ぴたりと止まった。息を弾ませながら、おおぎさんは立ち上がる。こちらへ向かってぺこりとお辞儀をする前に、私は拍手を送った。心の底

から素晴らしい演奏だと思った。おおぎさんには小手先の技術を越えた、貫禄のようなものがあつた。楽しげにピアノを弾く彼を見ると、この世界に悲しい事なんて何一つないような気持ちになってくる。

「いいもの、聴かせた。いいもの」

おおぎさんが笑った。人のびっくりする顔を見るのが嬉しくてたまらないと言った様子を隠して、それでもすべて隠しきれず唇の端を曲げてにやりとした。

その笑いに、私は彼の事故以前の姿を垣間見たようない気がした。

「おおぎさん、一体どうしたらそんな演奏ができるの？」

傍へ寄って、興奮に腕を掴みながら私は問い正そうとした。

そのときだ。

視界の定まらない違和感が私を襲った。駅前で受けたものと同じ感覚……まさか、また？ そう思った途端、床が大きく揺らいだ。すぐに家がゆさゆさと揺れ始める。壁に掛かった写真立てや額縁が大きな音を立て

て壁に打ち付けられる。

「やだ、大きいわ」

背後でおおぎき夫人がつぶやいたのと同時に、テーブルからティーカップが転げ落ち、不協和音が響いた。それは家が上げた悲鳴のように聞こえた。へなへなとその場にくずおれる。

鼓動が速い、息が切れる。胸が痛くなる。やだ。私、また気持ち悪くなってきた。……どうしてこんなに揺れるんだろう。もう、いい加減にして。

目を瞑ってわきあがる気持ち悪さに堪えていると、大きな手が肩に触れた。薄目を開けると目の前におおぎきさんの顔があつて、彼もまた苦悶の表情で、襲いかかる震動に必死で堪えていた。

その手は一秒先の予想もつかない未知の恐怖に細かく震えていたが、男性の力強さで私を抱きしめて離さなかった。腕は夜の海に浮かんだ一本の太い丸太のようで、しがみつくと不思議な安心感があった。私は、守られている。そう思うと、どんなにひどい災害も我慢することができるような気がした。

もう少し。もう少しの辛抱よ。すぐにまた静けさがやってくる。大丈夫、今回も何事もなく過ぎるから。

必死の思いで自分に言い聞かせていると、耳元に彼の熱い息がこぼれた。

「あ……や……ね」

おおぎきさんの低い声が、家具の打ち付けられる激しい物音とは別の場所から、静かに聞こえてくる。私は目を開いた。おおぎきさんの顔を見上げた。

「そばにいる。だいじょうぶ、だ……あやね」

ボタン、と大きな音がしてピアノの鍵盤蓋が乱暴に閉まった。それからしばらくは何の物音もしなくなった。足の感覚がない。代わりに、涙が滲むほど膝の痺れを強く感じた。おおぎき夫人に肩を支えられ、ようやく私は立ち上がった。

立ちくらみを起こしたあとのように、鈍い痛みがこめかみをつつく。

「大丈夫？」

心配そうな顔で私を見るおおぎき夫人の顔が何重にもぶれている。大丈夫です。返事をした声が震えて

いた。私をソファに座らせると、おおざき夫人は割れたティーカップをまたぎ越して、冷蔵庫から冷たい麦茶を持ってきてくれた。

口をつけると、頭のうずきが少しだけ弱まった。

「地震が起ると、きまって頭痛がするんです。どんなに小さな揺れでも、気持ち悪くなっちゃって」

「そう言う人、多いうて聞いわ。一時間くらい前にも小さな揺れがあったけれど、大丈夫だった？」

「そのときも、駅前で倒れてしまってた……」

まあ、と呟いて、おおざき夫人は眉をひそめた。

「それは大変な思いをしたわね。でも怪我がなくて何よりです」

私たちはどちらともなく互いの手を握っていたが、二人とも指先は真冬のように冷たく凍えていた。

視界の隅におおざきさんの姿が見えた。彼はピアノの前に立って光沢する鍵盤蓋を優しく撫でていた。おおざき夫人が手を伸ばしてリモコンを取る。どのテレビ局も地震速報を流していたが、規模は思いのほか大きくなかった。震源地は神奈川県東部だったが、そ

こでも最大震度は四ほどで済んだそうだ。交通機関も運転を続けているらしい。

「このごろ、本当に多くて嫌になるわ」

おおざき夫人が小さく呟いた。

ポーン。

おおざきさんの弾く低いピアノの音が耳に届く。

49Aの「ラ」の音。

それから二時間ほど、私はおおざきさんの演奏を聴きながら、外の様子をうかがっていた。

余震が心配だったが、テレビの地震速報はどうに消えていたし、携帯で地震のことを調べても、今回の余震については何も触れられていなかった。もしかしたら、地震の頻度が多すぎて、情報が上手く取捨されていないのかも知れない。「地震」と検索タグを打ち込んで、専らページを占めるのは三年前の千葉大地震のこと。

これから何が起こるかは誰にも分からないが、帰るなら今しかない。おおざき夫人に暇を告げると、席

を立った。おおざきさんもピアノを弾く手を休めて立ち上がる。

「おおざきさん、美しい演奏をありがとう。あなたのピアノを聴いて、大切なことを思い出したような気がするの。もう一度、私にとって何が必要なのか、考えてみるね」

別れ際、玄関の前でおおざきさんはもじもじとズボンを握っていたが、やがて意を決したようにポケットから何かを取り出した。

「ごめん。ぼく、悪かった。ごめんね」

彼の大きな掌には、見慣れたバレツタがきらきらと輝いていた。後頭部に手を添えると、さっきまで髪を留めていた位置に何も無い。きつと私を抱きしめたとき、手を伸ばしたに違いない。

「湊人！ 人のものを取ったらダメでしょう！」

蒼い顔をして息子を叱るおおざき夫人を宥めて、私は言った。

「そんなに気に入ったのなら、おおざきさんあげる」

「でも……」

「いいのよ。素敵なおピアノを聴かせてくれたお礼。大切にしてくね」

さようなら。

そう言つて、私はおおざきさんの家を出た。彼とはもう二度と会うことはないだろう、と思いつながら。

ドアを閉める直前、大切そうにバレツタを撫でるおおざきさんの姿が目に入った。

——好きなように弾けばいいのよ。

——本当に価値のあるものは、自分の中にしかないつてこと。

帰り道、私は電話をかけた。演奏会に来るはずだった、私の大事な友達に。

大学時代、私たちは同じサークルで知り合つて、いつも一緒に遊んでいた。学業ではライバルのように張り合つていた時期もある。卒業後、久しぶりに連絡を取った私たちは、直前までメールを頻繁にやりあつて演奏会を指折り楽しみにしていた。

「ごめん、今日の卒業演奏会だけど、急な用事が入って……みんなによるしく伝えて」

けれど、彼女は来なかつた。私が返事をする前に、その電話はすぐ切れた。いくらメールを送っても一向に返事が返ってこない。もしかしたら、心のバランスが乱れているのかも知れない。

彼女が精神的な病にかかっていることを、彼女からのメールで知った。快方に向かっていると聞いていたけれど、その病態について、私は詳しく聞かされていない。ただ思うのは、彼女が今もピアノを弾き続けていれば良いな、ということだけ。

駅前の坂道を上りきると、高い崖の上から町全体が見渡せた。鼠色の住宅屋根が密集する中、シャンパン色のライトに照らされ、私たちの大学がひとときわかるく浮かび上がっている。

「私、好きなように弾いてみるよ。自分の中にあるものを信じて」

彼女のことを思いながら、私は小さく呟いた。